



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター 第36号
Issue Date	2021-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84990
Type	journal
File Information	newsletter_36.pdf



埋蔵文化財調査センター
ニュースレター

特集 縄文文化中期にさかのぼる遺跡

北海道大学の札幌キャンパスでは、いつ頃、どのような環境下で人類の生活は始まっていたのでしょうか。キャンパス内には、縄文文化中期（約5,600～4,500年前）・後期（約4,500～3,200年前）・晩期（約3,200～2,500年前）の土器が発見されている地点が点々とあります。しかし、それらのほとんどは、河川によって上流のどこから運ばれてきて、その地点で埋まったものです（2頁、航空写真 ㊦）。一方、その場で人類が活動し、残されたと考えられる縄文の遺構や遺物もあります（同 ㊧）。その一つが平成21年度に試掘調査が実施された畜産製造実習室新営工事地点です。本地点からは縄文中期の土器が発見されました。これが現在、確認されているなかでは最も古い人類活動の痕跡となります。本札幌キャンパスでの人類の生活がどのような環境下で始まったのか、探っていくことにしましょう。

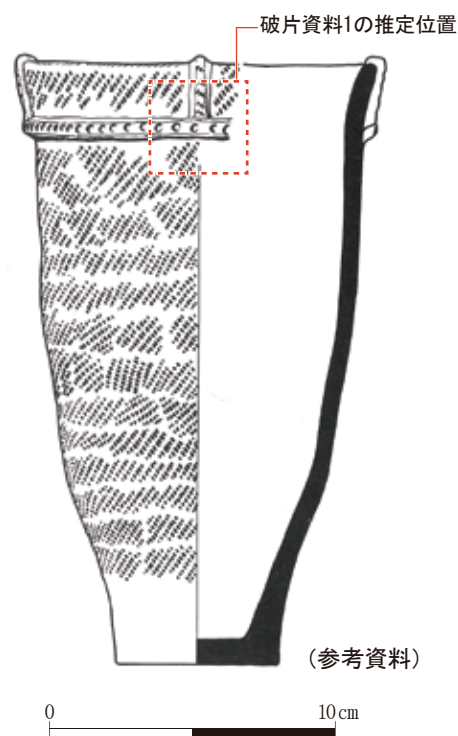


▲ 畜産製造実習室新営工事地点(2頁No.1)から出土した縄文中期の柏木川式土器

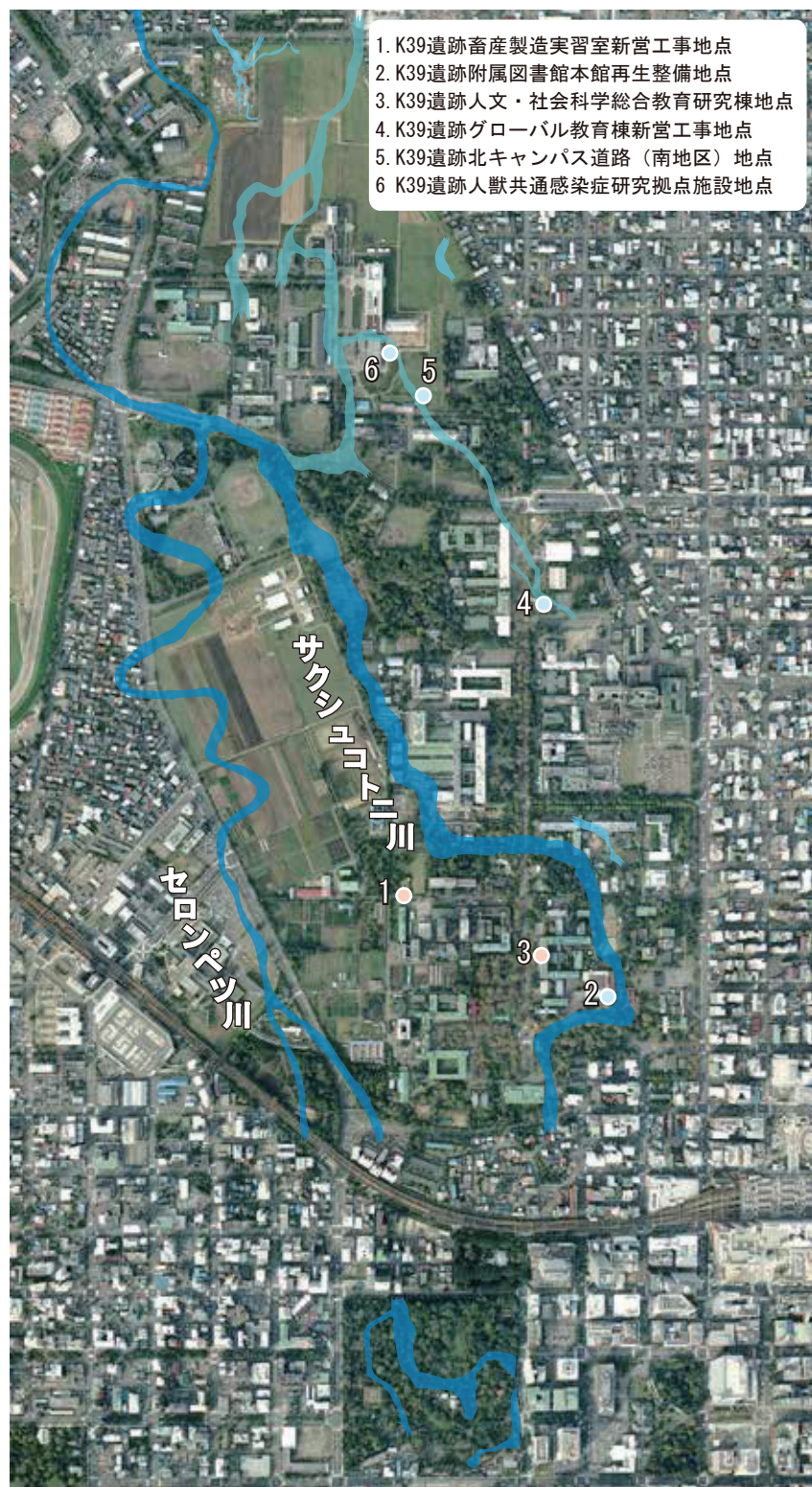
本地点で試掘調査を実施した結果、縄文文化と続縄文文化の遺物・遺構が濃密に分布していることが判明したため、建設予定の建物は他の場所に変更され、遺物・遺構は現状のまま保存されました。発見された縄文中期の土器は柏木川式で、約5,000年前のものと考えられます。参考資料は恵庭市柏木川遺跡4号住居址から出土した柏木川式土器の完形資料です（『柏木川』北海道文化財保護協会、1971年）。

試掘坑TP22の東壁断面写真▶

写真の土器は地表下約3mの深さの9b層(※)から発見されました（3頁、地層断面図参照）。



縄文文化の遺物・遺構が発見された地点



人文・社会科学総合教育研究棟地点 (No.3)



土坑と土器の出土状況

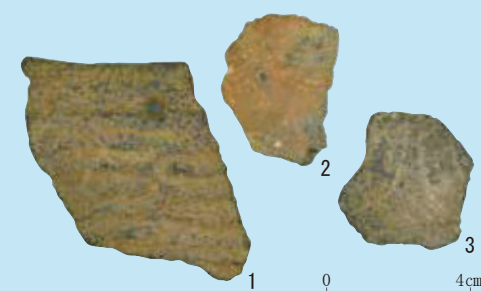
14d層からは、縄文晩期の炉址や土坑が多数検出されました。キャンプ・サイトとしてこの地点が利用されていたことを示しています。

人獣共通感染症研究拠点施設地点 (No.6)



北壁土層断面

同一の地層から、河川によって運ばれてきた多量の流木とともに、縄文文化の土器や石器が発見されました。本地点が位置する川筋は、サクシュコトニ川とは異なり、その上流側には縄文文化の遺跡があったことが推定されます。



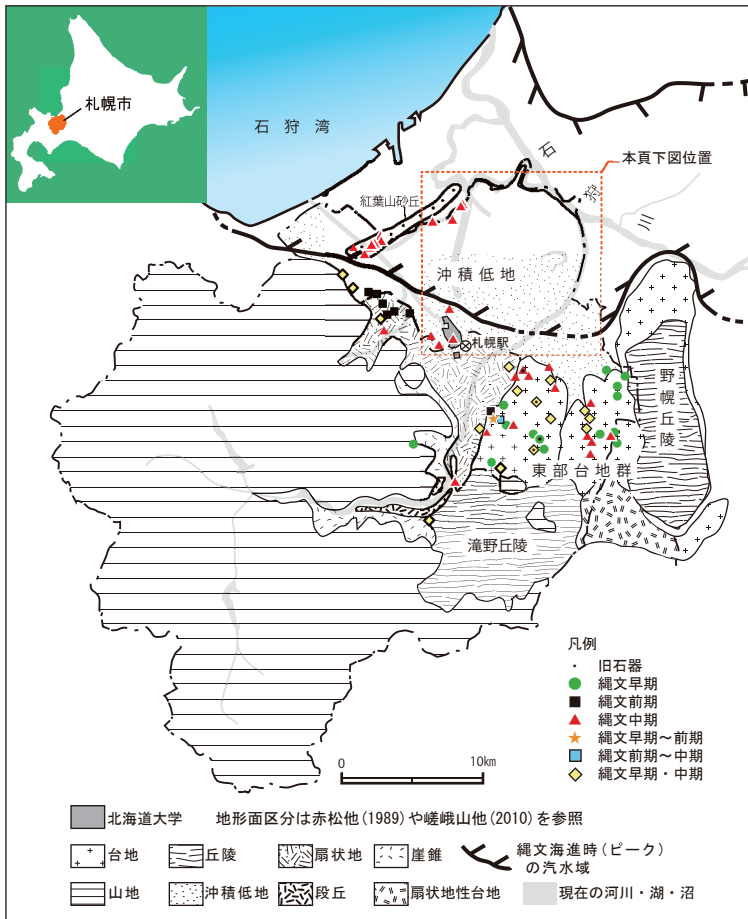
同一の地層から出土した縄文後期(1)・晩期(2・3)の土器

複数の時期に帰属する土器が混在して発見されました。土器の表裏面は著しく摩耗していたため、河川によって運ばれ、二次的に埋まったことがわかります。

▼ 北海道大学構内において縄文文化の遺物が確認された地点

No.	地点名	出土資料の縄文文化帰属時期	遺構（遺物出土状況）	報告書
1	K39遺跡畜産製造実習室新営工事地点（1頁参照）	縄文中期		『北大構内の遺跡 XVIII』
2	K39遺跡附属図書館本館再生整備地点	縄文中期・後期・晩期	（河川による二次堆積）	『北大構内の遺跡 XIX』
3	K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点（14d層）	縄文晩期	屋外炉址3基・土坑25基・小ピット20基 焼土粒集中3ヶ所・炭化物集中1ヶ所	『K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書 I』
4	K39遺跡グローバル教育棟新営工事地点	縄文後期	（河川による二次堆積）	『北大構内の遺跡 XXII』
5	K39遺跡北キャンパス道路（南地区）地点	縄文晩期	（河川による二次堆積）	『北大構内の遺跡 XVII』
6	K39遺跡人獣共通感染症研究拠点施設地点	縄文後期・晩期	（河川による二次堆積）	『北大構内の遺跡 XXII』

縄文海進と札幌市域の縄文早期～中期の遺跡



▲ 札幌市域における地形面と旧石器～縄文中期の遺跡の分布

地球規模での寒暖の変化は、海水準の変動に鋭敏に反映されます。約2万年前には寒冷化のピークにあったのが、その後、温暖化に転じ、縄文前期（約7,000～5,600年前）になると現在と比較して+2～3度ほど気温が高くなっていたと推定されています。それに伴い、海水準は現在と比較すると、約2万年前には-120m程低かったのが、縄文前期になると+2～5mにまで上昇しました（松島・前田1985『縄文時代の自然史』東京美術）。この一連の現象を縄文海進と呼びます。海進とは、海水準の上昇に伴って海岸線が内陸へ浸入することです。

縄文前期には、札幌市域の北部に海岸線が大きく入り込み、内湾（「古石狩湾」）が形成されていました。札幌市域と石狩市域の境界にある紅葉山砂丘は、この時期に形成された砂州の名残です。この砂州を境に古石狩湾は外海と内海（潟湖）に二分されるようになりました。温暖化のピークが過ぎた縄文中期には、河川から供給される土砂の堆積で内海はふたたび陸域化しました（海退）。遺跡が縄文早期・前期では東南部の台地や西部の扇状地に主に分布していたのが、中期になると北部の沖積低地（平野）へと分布が広がるのはそのためです。畜産製造実習室新営地点において、縄文中期に人類の生活が営まれるようになったのも、こうした縄文海進・海退の一連の変化が密接に関連しています。

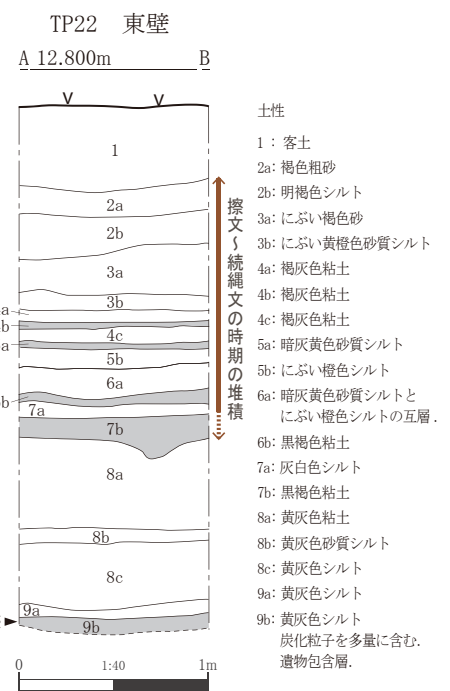
札幌市域北部沖積低地の形成と旧豊平川



▲ 札幌市域北部沖積低地における砂・砂質シルトと泥炭の分布（『さっぽろ文庫77 地形と地質』）

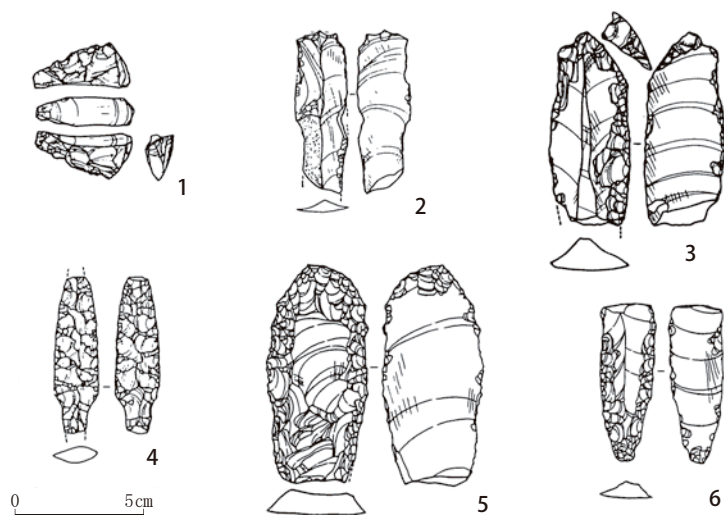
左図はボーリング調査の試料をもとに、地表下2mまでの深さの土層の分布をまとめたものです。

縄文海進が終了すると、内湾が形成されていた区域やその周辺では、旧発寒川や旧豊平川によって運ばれてきた土砂が埋積し、現在の沖積低地が形成されはじめます。旧豊平川の流れが、旧琴似川沿い、旧伏籠川沿いに順に移動したことで、これらの区域に砂や砂質シルトからなる微高地状の地形が形成されていったことが読み取れます。縄文中期の土器が出土した畜産製造実習室新営工事地点（右図）では、縄文中期からシルトを中心とした堆積が続いており、いち早く比較的乾燥した地形面が形成されたことが推定されます。



▲ No. 1地点の地層断面図
（※：この地層から土器が出土）

縄文文化より古い遺跡はあるのか？



▲ 札幌市域の遺跡から発見された旧石器（『新札幌市史第一巻通史一』）
1・2：S354遺跡、3：T464遺跡、4：T466遺跡、5・6：T151遺跡

札幌市域からは、断片的ながら縄文文化より古い時期に残された、いくつかの遺跡の存在が知られています。白石区本通のS354遺跡、豊平区羊ヶ丘のT464遺跡とT466遺跡、月寒東のT151遺跡からは、1万年前以前に作られたとみられる石器が発見されています（「札幌の旧石器文化」『新札幌市史第一巻通史一』）。遺跡はいずれも東部台地群に立地しており、こうした地域においては旧石器時代から人類が生活していた可能性が高いといえます。では、札幌市域北部の沖積低地ではどうでしょうか。北海道大学の構内で約1万年前より以前の更新世の地層に到達するためには、8m以上深くまで掘り下げないといけないため、調査のメスは及んでいないのが現状です。

埋蔵文化財調査センターによる令和2年度の活動

埋蔵文化財調査センターによる令和2年度の活動は、新型コロナの感染拡大による影響を大きく受けてしまいました。令和2年3月に開催予定であった調査成果報告会に引き続き、4月以降に予定されていた遺跡トレイルウォークやボランティア活動も中止となってしまいました。屋外での遺跡調査活動は6月以降、徐々に再開されるようになりました。北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟地点では本発掘調査が実施され、その他に第一農場道路等改修工事や北キャンパス第二農場東地区排水設備工事、極低温液化センター保管庫設置工事に伴った確認調査、北キャンパス創成科学研究棟東地区での計画調査が実施されました。



▲ 北キャンパス第二農場東地区排水工事調査風景



▲ 北キャンパス創成科学研究棟東地区調査状況

編集後記

考古学的に「最古」の評価には、「現状で把握されている限りでの」という注意が必ず伴います。それは常に書き換えられる可能性があります。本特集で紹介した「最古」の評価も、今後の調査次第では更新されていくことがありうることを留意しておく必要があります。（高倉）

北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター 第36号
令和3(2021)年1月31日発行

発行：北海道大学埋蔵文化財調査センター

〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

電話：011-706-2671 FAX：011-706-2094

e-mail：hokudaimaibun@gmail.com

URL：http://maibun.facility.hokudai.ac.jp/

印刷：柏楊印刷株式会社